2018.11.19

苦い記憶

小嶋祥三

わたしの昔の専門領域は生理学的心理学といってもよいだろう。心理学と脳生理学の境界領域である。そのため、生理学者と一緒になる機会があった。そこで経験した苦い記憶について書いてみる。

わたしが霊長類研究所の心理部門の助手になって間もないことだったと思う。所長だった近藤四郎先生に連れられて、ある宴席に参加した。どういう目的の集まりだったかは覚えていない。そこには発汗の生理学の権威の N 先生がいた。わたしの出身大学の早稲田ではGSR、今はSCRと呼ぶことが多い、の研究が盛んだったので、発汗についての表面的な知識はもっていたし、N先生の名前は知っていた。その席でわたしは脳について何やら発言したらしい（よく覚えていない)。その時、N 先生が烈火のごとく怒った。わたしは何のことだか分からず、ただ驚いていたが、どうやら心理屋が脳について語るのはケシカラン！ということのようだった。わたしには反撃する元気などなく黙っていたが、近藤先生もバツが悪そうに、下を向いたままだった。

この種の不愉快な記憶をもう一つ。ある時、生理学研究所で会があった。会の目的は覚えていない。当時わたしは神経生理部門の助教授だったかもしれない。その会で筋生理学の権威のE先生が、日本の心理学者は、S君をのぞいて、全部ダメだと発言した。わたしは黙っていたが、それなら生理研の一部門を心理学出身者に任せたらどうか、と心の中で思っていた。多分、立派な業績を出すだろう。このような、出身学部によって序列をつける雰囲気はアメリカでは皆無だった。中国や韓国は序列の社会らしいが、日本にも残っている儒教の影響だろうか。学校のお勉強ができる学生がよい研究を行うとは限らないのだ。

上に述べた、脳に興味を持つ心理学者への発言は、これらの先生の研究テーマが心理学の知識を必要としなかったにすぎないと思っている。感覚・知覚の研究者だったら多少は違ったかもしれない。無麻酔、無拘束の課題遂行中の動物の神経細胞の記録を行う技術の開発は、神経生理学者が心理学の必要性を気づかせる契機になった。前頭前野など高次の脳領域の機能がニューロン・レベルで問題できるようになった。それは学習心理学などが研究していた行動機能だった。霊長研の久保田競先生は心理学との連携の必要性にいち早く気づいていたと思う。さらに、脳機能画像技術、認知神経科学の進展は文理融合の機運を促進させた。しかし、日本の脳研究はその波に乗れず、日本の認知神経科学（そして、神経科学一般も）は低調のようにみえる。これは日本の脳研究者の心理学軽視、蔑視と無関係でないと思っている。

このホームページの『脳と心:認知神経科学入門』では副題を『文系の、文系による、文系のための』とした。それには、上で述べた苦い記憶が働いていたかもしれない。また、とくに第1章では、「脳が分かれば、すべてが分かる」的な神経科学者の傲慢で無思慮な発言に対する批判が底流としてあった。中には神経科学者に迎合する心理学者も現れ、「心の理

2018.11.19

論に関連する固有の領域があるので、心の理論の教科が必要である」などと発言したと聞いた。脳の研究など一度もしたことのない心理学者が、急に脳の知識をひけらかしたりしていた。わたしは内心アキレテいた。渡辺茂さんの言によると彼らは「改宗者」だそうだ。もっとも、今はまた改宗して元に戻っていると思うが・・・。